

絶対的窮乏化論批判

中村, 建治

<https://doi.org/10.15017/4362413>

出版情報：経済学研究. 21 (1), pp.127-165, 1955-07-20. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



絶対的窮乏化論批判

中 村 建 治

は し が き

資本主義的生産様式の支配する社会においては、資本の蓄積につれて労働者の状態は、賃銀の如何にかかわらず、悪化せざるを得ないというマルクスの命題は、今日二様の議論、すなわち相対的窮乏化論と絶対的窮乏化論、とを成立させている。前者は労働者の文化的慾望の不充足に、後者は生理的慾望の不充足にその論拠をおいている。両者とも労働者の受ける賃銀が労働力の価値以下に低下することをもつて、労働者の状態の悪化と理解しているといえる。この二様の議論によつて、マルクス窮乏化論は労働力価値以下論に解消されている。私自身このことについて疑問をいだいている。この二つの見解にしたがえば労働者の受ける賃金が、労働力の価値どおり、あるいは価値以上に支払われる場合には、マルクスの命題が成立しないことになるが、マルクスが「彼への支払がどうあるにせよ、高いにせよ低いにせよ、労働者の状態は

資本の蓄積につれて悪化せざるを得ない。」（資本論向坂訳四——一四九頁）と述べているのは、以上の如き事情にも妥当するものとしてだと考えられるからである。

したがつて、マルクス窮乏化論をこの二つの議論から救うためには、窮乏化論は賃銀が労働力の価値通りにまたは以上に支払われることを前提として議論されねばならないだろう。私は窮乏化論は労働力価値以下論とは別個の範疇であると考へている。

といつて後者が窮乏化論と全然無縁であるということではない。この点については本稿ではまだ言及してはいないが、後日相対的窮乏化論批判の際に採りあげるつもりでいる。

一

クチンスキーは、その中で絶対的窮乏化論を展開している彼の著書「労働者の状態に関する理論」Die Theorie der Lage der Arbeiter の序文において、次のように述べている。

「労働者の状態の意義をわれわれは労働者の生活諸条件の総体と理解する。決して賃銀の転化したものとは解しない。賃銀は探究さるべき対象の一部分領域にすぎない。」（二〇頁）この言葉からまずみちびきだされることは、労働者の状態は賃銀が高く支払われるか低く支払われるかということによつてのみ、より良く或はより悪くなるのではないということであろう。この言葉は、したがつて、彼のいわゆる絶対的窮乏化論が、賃銀のとう落によつて生ずる労働者の状態の変化に

ついでに叙述のみを内容としていないということの、クチンスキーの宣言とも理解される。絶対的窮乏化論の展開において、クチンスキーは資本論にある次の言葉に重要な意義をあたえる。すなわち「資本が蓄積されるにしたがつて、労働者の状態は、彼の受ける支払がどうあるにせよ、高いにせよ低いにせよ、悪化せざるを得ない。」（資本論、向坂訳四—一四九頁）というものである。労働者の窮乏化の本質もこの中にかくされている。クチンスキーは次のように述べる。「賃銀が高いにせよ低いにせよ——労働者の状態は悪化せざるを得ない。この言葉は最大の重要意義を有するものの確定である。それはマルクス窮乏化論が、古典イギリス学説と反対に、生物学的法則の上に立つておらないのみならず、賃銀理論の領域よりもはるかにより広い領域において構築されていることを示す。マルクス窮乏化論は、現実的包括的な、資本主義社会全体を支配する運動法則の上で組立てられている理論である。それはわれわれに次のことを示す。即ち賃銀の高低の如何にかかわらず、労働者の状態が時の経過と共に悪化せざるを得ないということ。」（クチンスキー五六頁）たしかに「資本の蓄積につれて労働者の状態は、彼の受ける支払がどうあるにせよ、高いにせよ低いにせよ、悪化せざるを得ない。」だが「どのように労働者の状態は悪化するのであろうか？どこに『悪化』の本質があるのだらうか」（クチンスキー五六頁）クチンスキーはかく設問する。

註 Jürgen Kuczynski : Die Theorie der Lage der Arbeiter, 1952.

二

「どこに労働者の絶對的窮乏化の本質があるのだろうか？」クチンスキーはこの問題の解決の旅を俗流マルクシスト達の批判をもつて始める。「多くの俗流マルクシスト達が信じているように、あるいは実質賃銀が継続的に低落せざるを得ないことにあるかも知れぬ。もつともそれはマルクスの誤れる解釈であり、その結果この解釈は資本主義の下でもある一定の期間にわたつて一定の諸条件の下で、実質賃銀がとう貴することが可能なことが明かとなつたときには、マルクスを改めることが可能であると信ずることを必然的に導いたのであるが。どこに絶對的窮乏論の本質がひそむのであろうか？マルクスは第一項目として非常に簡明に次のように言っている。

貧困の蓄積と。実際、実質賃銀が低落するとすれば労働者の状態は悪化するということはわれわれの経験に照してつねにそうである。しかし実質賃銀がとう貴すれば、（われわれは一経済循環内の短期間における賃銀上昇について述べているのでなく、一経済循環から他のそれへとわたる、したがつて十年以上にわたつて持続する賃銀上昇について述べている）労働者の状態が改善されるに違いないということは決してその通りでない。十九世紀の後半世紀について考察してみよう。この時期には、多くの発達した資本主義諸国において実質賃銀が上昇している。しかしこの時期に賃銀が少しでも生活の最低限以上に上昇したということができるだろうか？それについての疑問はあり得ない。というのは生存の最低限が実際上昇したし、しかも生理的根拠においてのみからでも上昇しているのだから。」（クチンスキー五七頁）だから実質賃銀が上昇しても、そのことが、労働者の状態が改善されたことを、直ちに意味するとは限らない。

賃銀は労働力の価格である。労働力の価値はその生産、したがつてまた再生産に必要とされる労働時間によつて規定さ

れる。だが労働力はただその支出によつてのみ実現される。しかしながら、労働力の支出、すなわち労働において、人間の筋肉、神経、脳髓等々の一定量が支出される。これは再び補充されなければならぬ。この支出が増大すれば、摂取も増大される必要がある。かくしてクチンスキーは労働強度の増大という要素を導入する。そして彼はいう。実質賃銀の上昇があつたとしても、それは労働強度増大の結果であり、そのために摂取必要量が増大しているから（他面実質賃銀はこの増大した摂取必要量を十分満たすほど上昇しないから）それは労働者の状態が改善されたことをしめす指標とは何等ならない、逆に労働者の状態は悪化したことを示す以外の何物でもない、と。「実際、労働強度の増大の故に、個々の労働者がより多くの労働力を支出するとすれば、その結果彼はより多くのカロリーを、より多くの栄養物を摂取しなければならぬ。すなわち高められた実質賃銀は、強化された労働力支出を補うのに十分であることを必然としない。」（クチンスキー 五七頁）

これが「賃銀の高低のいかんにかかわらず、労働者の状態は、資本の蓄積につれて、悪化せざるを得ない。」というマルクスの命題に対するクチンスキーの解答である。だがマルクスの命題を以上のように理解したクチンスキーが、「高められた実質賃銀は、強化された労働力支出を補うのに」十分でないために、労働者がおちいる状態について理解している仕方は独得である。われわれは次に、クチンスキーがこれをどのように解しているかを見ていく。

クチンスキー絶対的窮乏化論はカウツキー相対的窮乏化論の批判の産物である。クチンスキーはカウツキー相対的窮乏化論を次のように批判する。

「自己をマルクシストたりと信じ、マルクスのあらゆる思考過程を全く正しいと思惟しているが、ただ絶對的窮乏化は一つの傾向にすぎないと考え、これを克服する傾向が生じ、より強化されるに至れば、貫徹しないと考える若干の經濟学者がいる。」^{註一}「かかるマルクス學說の解釈は誤りである。それは事實に照應しない。」^{註二}「というのは絶對的窮乏化が貫徹されないとするれば、それは資本主義の下で労働者の状態は絶對的に改善される以外の何物でもないからである。」(クチンスキー六〇頁)カウツキーは貧困を社会的貧困と生理的貧困とに分つ。生理的貧困は、發達した資本主義國において克服されると説く。^{註三}生理的貧困が克服されると考えるカウツキーの思想がクチンスキーの槍玉にあがる。生理的貧困が發達した資本主義諸國で克服されるならば、これは労働者の状態が絶對的には改善されること以外の何物でもない。しかもマルクスの展開した窮乏化論は單なる傾向をその内容とするものではない。絶對的に貫徹される法則をその支柱としてゐると。クチンスキーは絶對的窮乏化法則が現實にどのように貫徹されているかをエンゲルスの批判を通じて、次に明かにする。クチンスキーはエンゲルスの「住宅問題」の中に述べられている次の思想の否定者として現われる。

「一八七二年のイギリスのプロレタリアは一七七二年の『家とかまど』^{註四}とをもつた農村の織工よりは、はるかに進んでいる。洞穴に住んでいる穴居民、粘土壁をもつているオーストラリア人、自己のかまどをもつているインド人は、どうして六月革命をおこし、パリ・コムミュンを断行することがあろう?とはいへ、資本主義的生産の実行以来、労働者の状態が、全体的に、物質的に悪化していることを疑う者は、ブルジョア以外にないことはもちろんである。」(クチンスキー六二頁、エンゲルス「住宅問題」大内訳三一頁以下)

クチンスキーはエンゲルスが「資本主義的生産の實行以来、労働者の状態が、全体的に物質的に悪化していることを疑う者は、ブルジョア以外にないことは勿論である。」と述べているにもかかわらず、「エジプトの肉鍋や、奴隸精神の養成所たる農村のちつぽけな工業や、『野蠻』やを憧憬することを拒絶」しているのに対して、「この場合、どこに労働者の窮乏化があるのだ？」と疑問を提出する。(クチンスキー六二頁)

「一八七二年のイギリスのプロレタリア」の状態は物質的により悪化している。したがって物質的にめぐまれた彼の祖先の状態を当然憧憬すべきではないか？これを何故エンゲルスは否定するのか？エンゲルスはイギリスのプロレタリアがラジオにめぐまれ、快適な肘掛椅子に坐っている見せかけの「はるかに進んでいる」状態に幻惑されているのに違いない。エンゲルスはイギリスのプロレタリアの状態が「物質的に悪化している」と一応表面では述べているが、その実、彼の状態が「物質的に悪化している」ことを否定しているのではあるまいか。エンゲルスのこの言葉の中に「どこに労働者の窮乏化があるのだ？」

エンゲルスは労働者の状態が物質的により悪化しているのにもかかわらず、彼の状態を「野蠻状態以下」への退歩とは考えてない。逆に「はるかに進んでいる」と考えている。クチンスキーはこのエンゲルスの思想をエンゲルスのためになげく。「第一に注意するべきは、エンゲルスはここではもはや、残念なことに、真実を伝えないということであろう。」(クチンスキー六二頁)

クチンスキーは唯物論者である。だが残念なことにエンゲルスの唯物論者ではない。クチンスキーはエンゲルスを、し

たがつて理解できない。クチンスキーはエンゲルスの「はるかに進んでいる」という言葉を次のように解する。

「イギリスの労働者が工場から家に帰る。その家は台所附住宅である。ここでは電燈が点ぜられている。したがつて彼は組合新聞を読むことができる。一五〇年前には彼はこのようなすばらしい燈火を持つことができなかったであろう。政治的にも十分に目ざめていなかったであろう。夜起きていたために、自宅で組合の諸問題を考えるために。就中彼にとつてはるかに重要な組合組織も、新聞もなかったであろう。彼は肘掛椅子に腰を下ろす。これはおそらく彼の祖先が使用したものよりも、より快適であろう。彼は音楽をきくために、ラヂオのスイッチをいれる。彼はナイフ・フォークそしてまたおそらくはるかにより優美な食器を使用する。はるかに文化的な環境で食事をとる。彼をして彼の祖先よりもはるかに政治的社会的に自覺させた思想にも没頭する。」(クチンスキー六三頁)

労働者の家庭生活における、電燈、快適な肘掛椅子、ラヂオ、ナイフ、フォーク、優美な食器等々は、奴隸、農奴等の生活用品に比して、はるかにゆたかな労働者の家庭生活をしめす。しかしかかるもの自体が労働者の「はるかに進んでいる」状態の説明とならない。もつとも支配階級によつて極端な消費制限を受けていた彼の祖先の家庭生活に比較すれば、かかる生活用品は労働者のより高い政治的社会的地位をしめす物質的基礎となつてゐる。まして組合組織、組合新聞、はるかに政治的に複雑な思想等は彼の祖先に比して、労働者のはるかに高い政治的社会的地位をしめす要素となつてゐる。したがつてエンゲルスもかかる意味で「はるかに進んだ」状態に一八七二年のイギリスのプロレタリアがあることを述べてゐる。

しかし労働者の資本家に対する政治的社会的地位は、かかるゆたかな生活用品、組合組織、組合新聞、「はるかに政治的に向上し複雑さを含んだ思想」等の存在にもかかわらず悪化している。それらが彼の資本に対する隷従の代償として、したがって彼の政治的社会的状態の悪化の代償として、更に同じことであるが、かかる政治的社会的悪化の物質的基礎である彼の生活諸条件の悪化の代償としてあたえられたものであるからである。エンゲルスはこのことを知っている。したがって「資本主義的生産の実行以来労働者の状態が物質的に悪化している。」ことを信じて疑わない。

だがクチンスキーはこのエンゲルスの言葉を理解できない。労働者の状態を労働者の生活諸条件の総体と理解しているにもかかわらず、彼にあつては労働者の物質的窮乏とは生理的窮乏である。肉体それ自体の悪化である。したがって彼の眼には労働者の肉体しか浮ばない。かくしてクチンスキーは叫ぶ！労働者は以前に比して比較にならぬ高度の文化生活を、より高い政治的社会的地位を享受している。しかしそれは物質的窮乏を犠牲にしてである。絶対的窮乏化法則は単なる傾向でない。絶対的に貫徹される法則であると。この法則の貫徹されている証拠を彼は探す。かくして彼は発見する。^{註二}次の表を。

栄 養 素		一八世紀の労働者		一九三五年における イギリス一五〇〇万 以上の労働者		一九三五年における 推定 最低必要量	
カルシウム	(グラム)	一・二	〇・五	一・〇			
鉄	分(ミリグラム)	一三三	九・六	一五			
ビタミンA	(国際単位)	六六〇〇	一二〇〇	五五〇〇			

ヴァイタミンB₁ (同 右)

一三〇〇

三五〇

五〇〇〇七〇〇

ヴァイタミンC (ミリグラム)

一一〇

五五

七五

クチンスキーはかくして次の如く結論する。「この表は労働者階級の絶対的窮乏化の非常に重要な側面をしめすと信ずる。われわれは次のことを見た。多くの点において、労働者が以前より『はるかに進んでいる』関係の中に生活していることを。彼の生活水準は、多くの点において、一般に社会的関係の向上とともに高まつていく。……しかし彼の食物は劣悪化している。」と。(クチンスキー六四頁) かくして一八七二年のイギリスのプロレタリアは一七七二年の『家とかまど』をもつた農村の織工よりもはるかにすすんでいるというエンゲルスの見解は皮相なものとしてしりぞけられる。

クチンスキーによれば、労働者の物質的窮乏とは、彼の食物がより貧弱になることである。かくしてクチンスキーにしたがえば、労働者の状態は「野蠻状態以下」への退歩である。「六月革命をおこし、パリ・コムミュンを断行する」能力に欠けていても、「洞穴に住んでいる穴居民、粘土壁をもつているオーストラリア人、自己のかまどをもつているインド人」の状態がはるかに進んでいることになる。多くのカルシューム、鉄分、ヴァイタミンをとつているが故に。もつともわれわれはクチンスキーが「野蠻状態」への復帰を、労働者の幸福なる状態と現実を考える非常識な人間とは決して思つてない。しかし資本主義体制の内部における労働者窮乏化の本質を生理的窮乏と理解するならば、労働者の行うべきすべての階級斗争の基本目標を生理的窮乏の克服として理解しなければならなくなる。ポナパルトによつて葉巻とシャムペン、冷鳥肉と腸詰をあたえられたルンペン・プロレタリアート軍隊の状態は、クチンスキーにしたがえば、彼等の絶対的窮

乏の克服に成功した模範的斗争形態であつたのである。

「ナポレオン万才!」「賜詔万才!」そして最後にわれわれの理論的擁護者「クチンスキー万才!」

クチンスキーはかくしてマルクス・エンゲルスと天地の距離をもつて遠ざかる。

マルクスは充溢せる社会変革の意識の下に資本主義社会を支配する運動諸法則の解明を行う。したがつて商品の分析ではじまり、諸階級の分析で終る資本論には、マルクスの社会変革の意志が一本の赤い糸のように貫ぬいている。そこには社会変革の物質的基礎が明白な姿態で描きだされている。社会変革の担当者、労働者階級の窮乏化事象も、その一物質的基礎として適確に解明があたえられている。労働者の窮乏化事象をわれわれは特に資本論第一巻第四篇相対的剰余価値の生産という章で見ることが出来る。この篇で労働者の状態が労働の社会的生産力の発展とともに悪化する事情がつぶさに分析されている。この分析の結果マルクスによつて次のごとく結論される。

「資本主義体制の内部では、労働の社会的生産力を高めるためのすべての手段が生産者の支配搾取手段に変じ、労働者を部分人間に不具化し、彼を機械の附属物に引き下げ、彼の労働の苦痛をもつて労働の内容を破壊し、独立の力としての科学が労働過程に合体されるに従つて労働過程の精神的諸力を彼から疎外すること、これらの手段は彼がそのもとで労働する諸条件をゆがめ、労働過程で極めて狭量陰險な専制に彼を服させ、彼の生活時間を労働時間に転化し、彼の妻子を資本のジャガノート車輪の下に投げこむこと、これらのことは第四篇相対的剰余価値の生産の分析に際しわれわれの見たところである。しかし剰余価値の生産のすべての方法は同時に蓄積の方法であり、また蓄積の拡大はすべて逆にかの方法の

發展のための手段となる。それゆゑ資本が蓄積されるに従つて、労働者の状態は、彼の受ける支払がどうあるにせよ、高いにせよ低いにせよ、悪化せざるを得ないということになる。」（資本論、向坂訳四ノ一四九頁）

マルクスは資本主義体制の内部では、労働の社会的生産力の發展が労働者の犠牲の下で行われるが故に、資本の蓄積につれて労働者の状態は悪化せざるを得ないと述べている。しかも彼の受ける賃銀がどうあるにせよ、彼の状態は悪化せざるを得ないと述べている。労働者は労働力販売を強制されている。この商品は資本によつて購買され、労働過程に合体される。資本がこの商品を購買するのはその特殊なる使用価値の故である。資本の魂は致富衝動慾に満たされている。労働力があたう限りの剰余労働を支出すること、資本はそのためあらゆる手段をつくす。資本は仁慈の精神に欠けている。

労働力は労働者の能力としてのみ存在している。したがつて資本が發展させる剰余労働を獲得するための方法が労働者にとどのような犠牲をあたえようと資本の関知するところでない。この方法が労働者にいかなる犠牲をあたえるかは後述する。資本によつて推進される労働の社会的生産力の發展は、労働過程に必要とされる精神上の諸力能を労働者から奪い、彼らを支配する権力の基礎としてそれらが資本において集積されることをもたらす。それは労働者を部分人間に不具化し、彼の行う労働をして単調な機械労働の反復たらしめる。それは労働者に貧困、労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道德的墮落を生産する。労働者の窮乏化の生産である。労働者窮乏化も労働力が資本によつて購買され、使用されることと密接不可離の關係にある。賃銀がどのように支払われようと、資本の蓄積につれて、労働者の状態は悪化せざるを得ない。

マルクスはついで第七篇資本の蓄積過程で資本の労働者に対する搾取慾を十分満足させ、したがつて資本の蓄積を可能

ならしめる条件として、相対的過剰人口の分析を行う。ここにおいても労働者の窮乏化との関連において分析されていることはいうをまたない。資本の致富衝動慾は剰余労働の搾取によつて満足される。そのためには労働力を資本の生産過程に合体せねばならぬ。しかし資本は労働力商品を生産することはできぬ。他方資本の致富慾は無限である。資本の致富慾を満足させるためには、たえず労働力が何らかの形で資本の要求に応じうる様に準備されていなければならぬ。この役割を相対的過剰人口が果す。マルクスはかくして先の文章に続いて次の如く述べる。

「最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をして常に蓄積の範囲及び精力と均衡を保たせる法則は、ヘファイトスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも更に固く労働を資本に釘づけにする。これは資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を条件づける。したがつて一方の極における富の蓄積は、同時に對極における、すなわちそれ自身の生産物を資本として生産する階級の側における貧困、労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道德的墮落の蓄積である」と。(資本論、向坂訳四ノ一四九頁)

身自らに貧困、労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道德的墮落を蓄積する労働者の状態とは完全なる人間喪失の状態である。マルクスの説く労働者の窮乏化とはかかる労働者の非人間化の状態である。資本主義体制の内部では、労働の社会的生産力の発展が、労働者の非人間化Ⅱ窮乏化を通じて行われる。労働者の窮乏化は彼の受ける賃銀がどうあるにせよ進展する。クチンスキーはマルクスの命題を労働強度の増大という因子を導入して理解した。実質賃銀が上昇しても、それは労働強度の増大の結果であり、しかも労働強度の増大に伴う摂取必要量を十分満たすほど、賃銀は高まらない。したがつ

て賃銀上昇は労働者状態改善の指標とならないと。このことは賃銀が労働力の価値以下に支払われる以外の何物でもない。

クチンスキーは労働者の状態を、彼の工場外の生活、すなわち消費生活における状態に理解している。労働者の家庭生活を左右するものは賃銀である。かくしてクチンスキーは賃銀至上主義者となる。したがって冒頭に引用した彼の言葉に反して、クチンスキー絶對的窮乏化論は賃銀理論をのみ土台として構築されている。彼にあつては労働者の状態が窮乏化するの、ただ彼の受ける賃銀が労働力の価値以下に支払われるからのみである。かくして労働者の状態は、クチンスキーにあつては、賃銀が労働力の価値以下に支払われることによつてのみ悪化する。賃銀が労働者の状態を左右する鍵である。労働者は賃銀を高く得んがためにのみ努力すれば良い。賃銀の物神性が既に完成している。

エンゲルスはいう。一八七二年のイギリスのプロレタリアは彼の祖先に比較して「はるかに進んでいる、」と。更にいう。彼の状態は「資本主義的生産の実行以来物質的に悪化している、」と。クチンスキーはこの言葉を理解できない。

どのように労働者の状態が物質的に改善されても、彼の状態は物質的に悪化せざるを得ない。このことは矛盾である。だが他方矛盾ではない。

註一 K. Kautsky : Bernstein und das sozialdemokratische Programm S. 127.

註二 クチンスキー前掲書六三頁

労働者は生きることを許されている。「彼が一定の時間無報酬で資本家のために（従つてまた剰余価値の共同消費者のために）働く限りにおいてのみ、彼自身の生活のために働くこと、すなわち生きることを許されている。……全資本主義的生産制度は、労働日の延長によつてまたは生産性の発展あるいは労働力のより大なる緊張等々によつて、この無償労働を延長することを中心とするものであること、従つて賃銀労働制度は一つの奴隷制度であり、しかも労働者がより良きまたは悪しき支払を受けると否とに拘らず、労働の社会的生産力が発展すると同じ程度に、一層激しくなる奴隷制度であること、これである。」（マルクス、ゴータ綱領批判、岩波版三五頁）労働者の窮乏化は労働力販売と密接不可分の関係にある。労働の社会的生産力が発展すると同じ程度に、労働者の受ける支払がどうあるにせよ、高いにせよ、低いにせよ、彼の状態は悪化せざるを得ない。

ここでクチンスキーにならつて「だがどのように労働者の状態が悪化するのだろうか？」とわれわれは問を發しよう。われわれのマルクス窮乏化理論本質探究の出発点はクチンスキーのそれと同じである。しかし辿る道は異なる。

われわれはあまりにも労働者の工場外での生活にとどまりすぎた。そこでは賃銀が主要な役割を演じていた。ここで工場へと足を向けよう。

資本制生産様式を支配する法則は、スターリンのいわゆる「剰余価値の法則」である。この法則の下に資本は絶対的及

び相対的剰余価値の生産に突入する。絶対的剰余価値の生産は労働日の長さを軸として回転する。相対的剰余価値の生産にあつては労働日は初めから二つの部分に、必要労働と剰余労働とに分たれている。絶対的剰余価値の生産を支配的とする生産様式にあつては労働者は資本に形式的に包摂されているにすぎない。絶対的剰余価値の生産に継続される相対的剰余価値の生産を支配的とする生産様式にあつてはこれと異つて、労働者は資本に實質的に包摂されている。この下で剰余労働を延長するために必要労働が短縮される。この短縮は労働の技術的過程及び社会的人員配列を變革することによつて可能となる。このことによつて労働の社会的生産力が高められる。相対的剰余価値の生産については資本論第一卷第四篇に詳述されている。これをここで再び取上げる余裕はない。だが相対的剰余価値の生産は労働の社会的生産力が資本の内在的生産力として現われる生産様式を前提にする、したがつてこの生産は労働の社会的生産力を高めることによつて推進される。労働の社会的生産力は、協業、分業に基づく協業、機械装置の充用、一般に自然科学、力学、化学等々の一定の目的への意識的应用、すなわち工学等の应用への生産過程の転化等を通じて、極度に發展される。だがこの労働の社会的生産力の發展は労働者の状態を悪化させる以外の何物でもない。この發展は資本主義的体制の内部では労働者の犠牲の下で行われるからである。

労働の社会的生産力の發展によつて相対的剰余価値の生産が發展する。だが「剰余価値の生産のためのすべての方法は同時に蓄積の方法であり、また蓄積の拡大はすべて逆にかの方法の發展のための手段となる。」したがつて資本の蓄積につれて労働者の側における貧困、労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道德的墮落が蓄積される。

クチンスキーもこれらの蓄積について述べている。

「貧困の蓄積」

クチンスキーは彼の絶対的窮乏化論の根底に産業準備軍を置いている。彼にあつてはその序論をなすマルクス以前のブルジョア経済学者の労働者の状態の悪化に関する理論の検討は、ただ単に相対的過剰人口が「生物学的過程」の結果出現するという彼等の理論の発見に止まるのみである。^{註一}資本主義的生産様式の下では、労働の社会的生産力の発展が労働者にあらゆる犠牲を強いることを基礎としてなされるが故に、労働者が労働を強制労働として遂行し、したがつて労働を彼自身の生活の手段として行っていることを当然のこととして受取っているブルジョアイデオログ達の逆立ちしている姿に思いが到らない。^{註二}したがつて労働者が生産を彼の生活の手段とし、消費を生活の目的にしている顛倒された形態を、クチンスキーはブルジョアイデオログから無批判に受入れる。クチンスキーによる労働者の状態の観察の仕方は、かくしてブルジョア・イデオログのそれと同じとなる。したがつてブルジョア経済学の検討の結果、クチンスキーによつて、声高く宣言されることは相対的過剰人口が、生物学的法則の上に出現するのではなくて、社会過程を通じて現われるということのみである。この高らかな宣言でもつて、彼の所謂絶対的窮乏化論が展開される。したがつて彼自身逆立ちしたままで労働者の状態を観察する。もつとも彼自身、この小論に引用した如く賃銀如何のみをもつて、労働者の状態は改善されるいは悪化するものでないと述べている。彼はその行論において、あるいは労働強度の増大という因子を導入する。労働者の状態の諸要素^{註三}(クチンスキー、七〇頁)の列举がある。しかしそれはすべて、彼の言明に反して、マルクスの命題を

彼自身逆立ちしたままで解こうとするむなしい努力の累積であるにすぎない。「太初に誤りありき」である。

クチンスキーの理解する労働者の状態はかくして工場外におけるそのみとなる。工場外における労働者の状態を支配するものは賃銀である。彼は賃銀至上主義者となる。このことがマルクスの「資本が蓄積されるにしたがつて、彼への支払がどうあるにせよ、高いにせよ低いにせよ、労働者の状態は悪化せざるを得ない。」という命題を彼独得の方法で解釈させることになる。

貧困が、十全な意味においては賃銀が労働力の価値以下に支払われることによつて生ずる労働者の状態として理解されなければならぬことは当然である。資本主義体制の内部では、労働力は商品となつてゐる。商品の価格はその商品の需要供給の一致したときに価値と一致する。相対的過剰人口の存在はこの商品の供給過剰を意味する。したがつて労働者の受ける賃銀は絶えず価値以下とならざるを得ない。だが相対的過剰人口を発生せしめた根本的な事情は資本主義体制の發展が、労働者の單純労働者化を推し進めたところに横たわつてゐる。したがつて労働者側における貧困の蓄積の解明も、相対的過剰人口の分析をもつて出発点とするのでなく、相対的過剰人口そのものを発生するに至らしめる事情の分析をもつて始められねばならぬ。この事情は資本の直接的生産過程の中に横たわつてゐる。したがつて、貧困の蓄積の解明にあつては、まずこの過程の中における労働者の状態を抽象して考察しなければならぬ。

労働するものは人間であるが、資本主義体制の内部では、人間の労働力が商品となることによつて、労働はもはや人間から抽象された存在となる。労働は労働者の労働でなく買手の所有する労働である。したがつて労働の生産物もまた買手の

ものである。買手は労働者から剰余労働をあたう限り支出せしめ、自己の富を増殖する衝動に駆られる資本である。必要労働をあたう限り縮少し、剰余労働をあたう限り大ならしめることに資本は全力を傾倒する。それが労働者に如何なる犠牲を強ようと資本の何等関知するところでない。必要労働部分はかくしてあたう限り縮少される。資本主義的生産様式はこのことを通じて労働の生産力を大ならしめる。

労働の社会的生産力の發展とともに労働者はますますみすばらしくなる。労働者に対して彼の生産物がますます疎遠な存在として、生産から独立した力として、彼に対抗する。労働者は、彼がより多く生産すればする程、彼の生産の力と量が増大すればする程、それだけですますますしくなる。労働者がより多くの商品を生産すればする程、彼はますます安価な商品となる。「労働者は富者のために驚異的な作品を生産する。だがそれは労働者には赤貧を生産する。それは宮殿を、だが労働者には穴ぐらを生産する。」（マルクス、経済学と哲学に関する手稿、マルエン選集補巻四）労働者の側における「貧困の蓄積」

「貧困の蓄積」はだがどうして生産されるか。生産物は労働の結果である。労働者が生産物から疎外されるのは、したがって労働において、彼が彼自身から疎外されている結果である。彼は現実には多量の生産物を生産する。それにもかかわらず、彼はこれらの生産物から疎外される。その原因は彼の労働そのものにふくまれていなければならぬ。

人類はその存続のために自然に働きかける。すなわち労働する。この労働において、それが実を結ぶためには無意識的にか意識的にか自然法則に則とつておらねばならぬ。したがって人類の側における、経験によつてか科学によつてか、い

ずれかを問わず、知識の蓄積が豊富であればある程、自然に働きかける力、自然への積極的適応力、すなわち労働の生産力はますます大となる。彼等は富む。

人類は自然に働きかける。労働する。だが人類は徒手空拳で労働するのではない。すこしでも発達した労働においては労働手段を使用する。彼は労働手段を自己の身体器官に附加して自然に働きかける。労働手段は彼が自己と労働対象との間に置くところの、そしてこの対象に対する彼の活動の導体として彼に役立つところの、物または諸物の複合体である。彼は物の機械的、物理的、化学的属性を利用してそれらを彼の目的に応じて、他の物に対する力手段として作用させる。したがって物の諸種の属性が彼によつて利用されればされる程、それは彼の労働において有効に作用することになる。人類は知識の蓄積によつて、物の諸種の属性を知り、このことによつて労働手段の改良を可能にする。労働手段の発達是人类の側における知識の蓄積を表示する。だが資本主義的体制の内部では知識の蓄積は資本の側においてなされる。

労働過程が個人的な過程である限りは、労働者はすべての機能を自己において結合させている。彼は労働において筋肉を活動させるが、この活動は頭脳によつて統禦されている。労働は頭の労働と手の労働との統一である。この統一は彼自身において保たれている。資本主義的生産の発展はこれらを分離する。これらが分離され、それらの敵対的性格がますます顕著となることを通じて資本主義的生産はますます発展する。

資本主義的生産は、一個別資本が比較的多数の労働者を同時に使用する場合にはじまる。比較的多数の労働者が同じ時間、同じ空間で、同じ商品種類の生産のために、同じ資本家の指揮の下で働くことは、資本主義的生産の出発点であ

る。この基礎の上で一定の諸条件の成熟につれて、労働の社会的生産力が発展する。相対的剰余価値生産が資本家の主要関心事となる。相対的剰余価値の生産機構は資本に属する。この機構の主たる物質的態容は多数の個別労働力と労働手段である。この機構の発展は労働の技術的過程と社会的人员配列の変革を通じて行われる。この変革の発展はまた頭の労働を手の労働から分離させる過程の発展である。この分離過程は、個々の労働者に対して資本が社会的労働体の統一と意思とを代表する単純なる協業において初まる。それは労働者を部分人間に畸形化する工場手工業において発展する。それは科学を独立の生産力能として頭の労働を手の労働から分離して資本に奉仕せざるを得ざらしめる大工業において完結する。

人類は自然に働きかける。だが孤立した個人として働きかけるのではない。他の個人との協働において働きかける。他人との協働において労働する場合には、共通なる意志の決定を必要とする。更にこの意志を貫徹させるための種々の方法を決定せねばならぬ。したがって各人は一堂に会さねばならぬ。現実の労働に先立つて、ここで精神的諸力能の会議が開かれる。この会議を十分効果あらしめるためには、各人の社会についての自然についての知識の蓄積を必要とする。だが資本主義社会では意志はすでにあたえられている。あたう限りの剰余価値生産。これが至上命令である。多数の人間の長々しい談議に代つて資本の強力な意志はすでに確立されている。残る問題は意志貫徹の方法である。労働者の経験が物を言う時代には、資本は不承不承忍耐する。もつとも金力に物を言わせて、彼らの生活手段を資本に転化する。彼らに経済的に資本への従属を余儀なくさせる。この上で資本はおもむろに彼らの身についた経験に報復を開始する。多数人の協働

によつて成立している労働の社会的機構は資本の私有するところである。この生産機構に属している各人が全体について配慮することは余計なお節介というものの、しかも君達が支出する労働力は君達の所有物ではない。労働力の使用がどうあるうと君達の関知するところでない。購買した労働力をもつとも経済的に利用する。これがこの社会の最高原理である。君達はあまりにも種々な熟練を身につけている。君達が各人各様にもつている独得の才能がそのために地に埋れている。君達はむら気がありすぎる。その為に私は困る。だが君達も損失を蒙っている。双方の利益のために君達が独得にもつてゐる才能を十分發揮できる機会をあたえよう。機構全体についての知識が失われる？心配しないで良い。それは私が十分責任をもつて配慮するから。労働力が畸型的に発達する？それは仕方がない。君の才能を十分生かすためだから。労働者はかくして部分人間に不具化する。彼らの局部的熟練は温室的に助長され、彼らの労働力は終生変らぬ部分器官に転化する。彼らにおいて失われた精神的諸力能は資本において集積される。だが労働において経験にもとづく知識が主たる役割を演ずる限り、資本は価値増殖慾を十分に満足されない。労働者側に残存する精神的諸力能が、資本に抵抗する。資本はしたがつて彼から精神的諸力能を完全に奪わねばならぬ。このことがなければ搾取慾も十分に満足されぬ。支配力も強固となり得ぬ。科学を資本は買う。科学の労働過程への合体によつて労働の技術的過程は徹底的に変革される。今迄労働者が所有していた精神上的の諸力能は労働手段に吸収される。労働者はかくして頭の労働から疎外され、機械の附屬物になり下る。彼の行う労働は單調なる機械労働の反復である。この労働はだが精神諸力を彼から奪うのみでない。彼の肉体諸力をも奪う。それは頭の労働を要しない。しかも大なる肉体労働を要しない。彼の労働は児童にでもできる労働である。彼

はかくして無価値となる。だが彼を安価にさせた生産機構の変革は、このことによつて労働の生産力を増大させたのである。「労働は富者に宮殿を、だが労働者には穴ぐらを生産する。」

資本の規定的動機は剰余価値の獲得である。資本の致富慾は無限である。獲得された剰余価値が金の果実を生むことなく消尽されることは資本にとつて悪である。えられた剰余価値は資本としての生活を開始しなければならぬ。かくして蓄積がなされる。アブラハムはイサクを産み、イサクはヤコブを産む。

かくして剰余価値の生産のためのすべての方法は同時に蓄積の方法であり、また蓄積の拡大はすべて逆にかの方法の発展のための手段となる。だがすでに述べたように資本の蓄積が行われるためには資本の生産過程に労働力を合体させなければならぬ。資本はその欲する時、場所、において、つねに自由に利用しうる労働力を確保しておかねばならぬ。相対的過剰人口または産業予備軍がこの役割を果す。資本の致富慾は満足される。「相対的過剰人口または産業予備軍をして常に蓄積の範囲及び精力と均衡を保たせる法則は、ヘファイトスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも更に固く労働者を資本に釘づけにする。」

かくして相対的過剰人口が労働者をして、資本の指揮のもとへの屈服を強いることによつて、資本の価値増殖慾は十分に満足される。相対的過剰人口は富の蓄積に対応する貧困の蓄積を条件づける。したがつてまたそれは貧困の物質的基礎である単調なる機械労働の反復をも条件づける。このことによつてまた労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道德的墮落の蓄積をも条件づける。

「労働苦の蓄積」

クチンスキーはいう。「労働衛生事情の歴史がしめすものは、労働苦が実際に増加した。しかも就中、労働過程における労働強度の増大との関連において、増大したということである。」（クチンスキー五八頁）クチンスキーは絶對的窮乏化論者である。彼の理解する絶對的窮乏とは生理的窮乏である。生理的窮乏を彼は肉体それ自体の悪化に理解する。したがって労働苦とは肉体的苦痛である。肉体的苦痛とは労働強度増大にもかかわらず十分な栄養物が摂取されえないことである。かくして労働者は疾病におちいる。疾病とは労働苦をしめすものである。クチンスキーは労働苦をこのように理解する。かくしてクチンスキーによつて、労働者がおちいる疾病の種類が述べられる。心臓病、胃腸病、頭の病氣、特に労働強度の増大に関連して神経系統の病氣等々が。

労働者は自己の生活を工場出門を出たときからはじめる。工場における彼の生活は、彼自身の生活にとつては、手段にすぎない。彼にとつては労働していないときが幸福であり、労働しているときは不幸である。労働は彼の生活慾望を充足させるものでない。労働以外の慾望を充足させる手段である。したがつて労働する必要がなくなれば、労働はまさにペストのごとく忌み嫌われる。この労働は強制労働である。自発的労働ではない。自発的労働は労働苦をあたえない。その労働がいかに労働強度の増大を要求するとしても。

人類はその存続のために自然に働きかけねばならない。労働しなければならぬ。労働は人間を動物と區別させる。もつとも蟻、蜜蜂等も労働する。彼等は巢をつくる。動物はだが直接的肉体的慾望に支配されて生産する。動物は一面的に

しか生産しない。動物にあつては労働、生活行為を自己から区別しない。人間はこれに反して、肉体的慾望から自由に労働する。しかも肉体的慾望から自由に労働することによつて、真に労働するのである。人間の労働とはかくの如き労働である。

人間は意識的存在である。したがつて人間は精神的慾望にしたがつて労働する。人間は生活行為そのものを彼の意慾および彼の意識の対象とする。彼は意識的な生活行為をもつてゐる。すなわち観念的に前もつて生産する。現実の労働においてこの生産物を現実化たらしめる。現実の労働すなわち生活行為は彼にとつて手段である。この現実的生活行為によつて彼の目的を實現する。この目的は彼自身によつて設定される。現実の労働においてこの目的實現のために自己自身にしたがつて彼は労働する。この労働には何等の被規定性はない。彼の労働は自由なる労働である。自由な生活行為である。この自由なる労働は彼の精神的慾望にしたがつて、彼によつて実行される。その労働は彼の精神的慾望を満足させるが故に、彼によつて実行される。彼の精神的慾望を満足させるのは、その労働が彼の精神的諸力の活動を要求するからである。彼は、己の精神的諸力の活動によつて、労働を享樂する。彼の精神的諸力の發揮が、神経を一定の昂奮状態に置くからである。

人間はこの自由なる労働において精神的諸力を活動させる。その労働が複雑であればある程、彼は精神的諸力の活動を大ならしめる。彼は労働に夢中になる。その労働が単調であればある程、この労働の反復は精神諸力の活動を必要としな

れ、したがつて精神諸力の活動を要求しなくても、一定の限度内においては、労働苦をあたえない。精神諸力の活動を要求しない単調な労働においても、この労働は肉体的諸力の活動を要求し、このことによつて神経を一定の昂奮状態におくからである。もつともこの労働が精神諸力の活動を要求しないために、その労働が労働苦をあたえるものに一変するまでの範囲は小さい。だが機械労働は肉体諸力の活動をも大部分奪う。

単調なる機械労働の反復はシシュフォスの労働苦をあたえる。精神諸力の活動を疎外し、更に肉体諸力の活動をも大部分奪うからである。それは筋肉活動の一面的な性質の故に労働苦をますますあたえるものとなつてゐる。だがこの機械労働自身一定の限度においては自由なる労働の性質をもつてゐる。^{註四}機械労働自身労働苦をあたえるものでない。それが一定の限度をこえて反復されるが故に労働苦をあたえるのである。では機械労働を一定の限度をこえて労働者に強制するものは何か？

人類は自然に働きかける。しかし孤立した個人として働きかけるのではない。多数人の協働において働きかける。資本主義的生産様式の下では労働者は労働力を資本に販売する。彼の労働は他人の労働となつてゐる。しかも資本が労働力を購買するのは、それをしてあたう限りの剰余労働を支出させることにある。したがつて彼の行う労働は自由なる労働として彼に享樂をあたえる範囲をこえたものとならざるを得ない。機械労働は単調なる労働の反復である。それが彼に享樂をあたえる範囲は小さい。したがつてそれは直ちに強制労働に一変する。

単調なる機械労働の反復はかくして彼にシシュフォスの労働苦をあたえる。それはまさにペストの如く忌み嫌われる。

だが彼はこの労働を反復せざるを得ない。「労働苦の蓄積！」「同じ機械的な過程が絶えず繰返される果しない労働苦の憂うつな反復は、シシュフォスの苦痛にも似ている。労働の重荷が、シシュフォスの岩と同様に、疲れ果てた労働者の上に幾度でも落ち帰ってくる。」（資本論尙坂訳三ノ一九四頁）

「奴隷状態の蓄積」

「実際、金融資本による全世界の殖民地化の歴史を知るならば、何億という人口に対して、時代の経過とともに、インド・アフリカにおいて成立した諸条件に思いを致すならば、われわれが今はじめて経験している最も残酷な奴隷状態の蓄積、一国の殖民地におけるファッシズムの支配を想起するならば、何人も次のことを疑い得ないであろう。

マルクスがかかる諸命題を記述したときこのかた、全く恐ろしい程の大量の奴隷状態が蓄積されてきた。」（クチンスキー五八頁）クチンスキーはいう。奴隷状態は、金融資本主義時代に到つて、マルクスの時代とは比較にならぬ程、蓄積された、と。だが奴隷状態は具体的には労働者のいかなる状態をさすのか？奴隷状態は奴隷状態だ！奴隷状態そのものの言葉のせんさくはわれわれの問題ではない。われわれは奴隷状態の蓄積を問題にしている。いかに多く蓄積されたか、それが問題だ。だがマルクスの生きていた時代に比して、何と巨大な奴隷状態の蓄積が行われたことか！クチンスキーはこのように述べている。

単調なる機械労働の反復は、労働者にシシュフォスの労働苦をあたえる。この労働の反復は労働者を労働に没頭させない。それは強制労働である。しかし労働は彼の生存のために続行せねばならぬ。かくして彼は、彼を労働に駆りたしめ

る機械の奴隸となる。機械の中にこもっている黄金神の息吹きは、絶えず彼に吹きかけられている。だがそれのみでない。黄金神は生きた現身をつかつて、労働者を奴隸労働に駆りたらしめる。

単調なる機械労働の反復は彼を労働に夢中にさせない。彼は労働から逃れたいと思う。できるだけ少い労働力支出でもつて、工場の門を出たい。機械にこもっている黄金神はそれを許さない。彼は黄金神に敵意を抱く。労働者の団結が反抗力を増大させる。黄金神はその反抗力を撃破せねばならぬ。

労働者は工場外にあつては、一個の独立した人格である。彼は何人にたいしても平等にふるまう。もつともそれは形式的にすぎないが。だが工場に足を一步ふみ入れるや否や彼は形式的にも独立性を失う。彼は一産業兵士となる。彼は一兵卒として、將軍、將校、下士官からなる完全な位階制度の統禦の下におかれる。上官の命令には絶対に服従！これが黄金神に賞讃される彼の唯一の美德である。だがこの服従は上官に対する尊敬の念、したがつて忠誠心によつて裏付けられていない。服従はしたがつて屈従である。彼はまつたく意思なきものとなる。「物を言う動物」となる。奴隸と違うのか。奴隸は使用者の意に副わなければ鞭の罰を受ける。労働者は鞭の罰の代りに、罰金、賃銀減額の罰を受ける。どちらの罰が重いのか、判つたものでない。更に労働者には彼の生命を脅す「解雇の罰」が加わる。「奴隸状態の蓄積！」

「無知の蓄積」

「人は異論を唱えるであろう。今日はあるかに多くの人間が、半世紀前に比して、読み、書き、算数ができると。それは全く正しい。それにもかかわらず無知は増大している。」「決して相対的であるばかりでない。」「絶對的にもまた。」「(ノ

クチンスキーは絶対的窮乏化論者である。だからつねに「絶対的」である。だがどのように「絶対的」「無知の蓄積」が行われるのであろうか。彼は資本論出版当時と今日とを比較する。レーニン・スターリンによつて、より發展され、深化されたマルクス・レーニン・スターリン主義に則つて、われわれは今日を理解しなければならぬ。現代すなわち金融資本主義時代を理解しなければならぬ。窮乏化論もしたがつて、今日の立場で理解されてはじめてその本質を把握することができる。帝国主義国によつていかに多くの殖民地が搾取されているか。労働者群は資本論当時と比較して今日はるかに多くなつてゐる。アフリカ・インド・アルゼンチン等において。この殖民地労働者を考慮にいれるならば、資本論においてはイギリスが例にとられてゐるから、われわれもイギリスの今昔でみてみよう。「イギリス資本によつて搾取されている労働者中に占める文盲の割合は五〇年前乃至一〇〇年前のそれに比較してはるかに高くなつてゐる。」(クチンスキー五八頁)

アフリカ・インド・アルゼンチンの無学文盲な殖民地労働者を考慮にいれることによつて、クチンスキーは「無知の蓄積」を主張する。だがこのことはかえつて彼がイギリス本国の労働者の「知識の蓄積」を是認していることを意味する。クチンスキーは事実それを是認している。労働者は「半世紀前に比して読み、書き、算数ができる。」「それは全く正しい。」と。

確かに、はるかに多くの労働者が五〇年前に比して、読み、書き、算数ができるようになつてゐる。その意味で「知識の蓄積」がある。が他方それは「無知の蓄積」である。「知識の蓄積」がある。それは階級斗争の成果である。しかしこ

の蓄積は無知の蓄積の代償としてあたえられたものである。しかもこの知識の蓄積自身無知の蓄積以外の何物でもない。労働者は家庭でその生活過程を送る。だが家庭においてそのすべてを送るのではない。彼は工場においても生活する。そしてこれが眞の生活である。動物は自然に対して消極的に適應するのみである。これに反して人類は自然に積極的に適應する。すなわち生産を行う。この生産において動物と區別されて彼は眞に人間たる性質を獲得する。知識の蓄積は、その生産が複雑であればある程、ますます必要とされる。

われわれはすでに労働の社会的生産力の發展に伴う、相對的剰余価値の生産の發展にあつては、それが労働者の犠牲の下に行われるが故に、労働者に労働苦をあたえ、また彼を奴隸状態に陥入れることを見てきた。彼に労働苦をあたえる機械労働は、労働者によつて繰返される單調なる労働である。彼の精神諸力は彼から分離されて機械に吸収されている。彼の頭脳は児童のそれでも構わない。労働は、労働の社会的生産力の發展とともに、「労働者を機械におきかえる。それは労働者を野蛮な労働に後退させ、他の一部を機械にする。それは智力を生産する。だがそれは労働者には無知やクレティン病を生産する。」(マルクス、経済学と哲学に関する手稿)

労働者の工場内における生命活動は労働者の、動物と違つた生活過程であるが、この活動において彼はますます無知となる。單調なる機械労働の反復は彼の精神諸力の活動を許さない。單調なる機械労働は直ちにこの労働に必要とされる知識の蓄積を彼に許す。精神諸力が發達する。だが精神諸力は直ちに疎外される。精神諸力はその活動の場所を求めるがあたえられない。この労働の反復は彼に知的にならしめる条件をあたえない。「無知の蓄積。」

労働者は読み、書き、算数ができる。知識の蓄積がある。精神諸力の発達がある。だが彼は工場において精神諸力を活動せしめることができない。彼はしたがって家庭においてその活動の場所を求める。単調なる機械労働の反復は極度に神経系統を疲労させる。彼の知的荒廢をもたらす。精神諸力の活動を阻害する。だがわれわれはここで彼が自己の労働力を正常なる形態で維持し、育成しうる状態にあることを前提する。換言すれば彼が自己の習慣と生活要求にもとずいて必要とする生活手段と彼が自己の為に費す時間とを自由にしうる状態にあることを前提にする。彼の行う知識の蓄積もまた無知の蓄積に外ならぬことを論証するために。彼は家庭において精神諸力を活動させる。この精神諸力の活動もまた注意力によつて統率されなければならぬ。彼の行うこの行為は自由なる労働である。他から強制されることなき労働である。彼は工場における強制労働において、精神的及肉体的諸力の活動を阻害されている。このことによつて不快の感情がうつつ積されている。労働苦の蓄積がある。したがって彼が家庭で行う自由なる労働において、このうつつ積された不快の感情に満足にあたえる対象があたえられなければ注意力は發揮されえない。かかる対象があたえられてはじめて精神諸力は注意力に統率される。

彼は読み、書き、数えることができる。知識の蓄積がある。だが彼は生産において、知識の獲得によつて発達した精神諸力の活動を疎外される。彼はしたがって精神諸力の活動を、消費生活、動物としての人間としての生活においてのみ行う、それは動物としての彼が要求するものために發揮される。

人間としての人間の生活は彼に労働苦にあたえる。労働者は生産の主体である。したがって真の人間である。だが彼は

人間としての人間としては苦惱多き人間である。したがつて彼の知識の蓄積は人間としての人間として生きる悲哀の歌である。それは知識の蓄積をのろう知識の蓄積である。それは動物としての人間として生きることをすすめる知識の蓄積である。それは肉慾を満足させる書物である。

知識の蓄積は無知の蓄積である。

「粗暴の蓄積」

単調なる機械労働の反復は、労働者の精神的及び肉体的諸力の活動を許さない。精神的及び肉体的諸力の活動にとまなう、自由なる、自然的なる感情の表白を許さない。このことによつて逆に感情の発達がある。不快なる感情のうつ積がある。

彼は生産において苦痛を味う。生産において、彼は精神的及び肉体的慾望を満足されない。不快なる感情のうつ積が増す。だが彼は生産を続行せねばならぬ。不快なる感情の爆発をおさえるために、彼は意志力を最大限に發揮せねばならぬ。

この意志力の發揮は、他からの強制において、強制労働の遂行上、なされている。この強制が一たんのぞかれるや、うつ積された感情は、はけ口を求めて流出する。うつ積が大であればある程、その流出ははげしい。かくして彼は感情と激情にのみ支配される。理性は彼の服するところではない。彼の感覚的な、昂奮しやすい性質は、思慮と、堅忍を要する活動とを、他からの強制のない限り、或いは彼の自由なる行為において実施せしめない。

彼は人間としての人間の生活において、自己を疎外され、非人間化される。したがつて彼は動物としての人間において自己を取戻す。彼は人間としての人間の生活において、激情を發達させる。彼は動物としての人間の生活において激情にのみ支配される。彼は獸的狀態においてのみ自己を取戻す。「粗暴の蓄積」

「道德的墮落の蓄積」^{註五}

労働者は生産の主体である。したがつて眞の人間である。労働者はこの意味で眞の労働者である。だが労働者はこの生産において、非人間化され、動物となる。かくして彼は現實に労働者となる。

労働者は生産、人間としての人間の生活、において自己を疎外される。したがつて彼は消費、動物としての人間の生活、において自己を取戻す。

彼は生産において、精神的及び肉体的諸力を活動せしめない。だがそれは、彼がこれら諸力を具有しないからではない。したがつて、これら諸力は他に活動の場所を求める。しかもこれら諸力は、生産における不快なる感情のうっ積の結果、この不快なる感情に満足にあたえなければ、注意力に統率されない。彼はかくして、感情にのみ支配されて行動する。彼は動物そのものとなる。いな精神的及び肉体的諸力の活動をともなうが故に、始末のわるい動物となる。

彼は生産において苦痛を味う。したがつて彼は破壊にその享樂を見出す。物のうちこわし、喧嘩、残忍な行為、人の弱点をあげつらう交際、等は彼の最も享樂する行為である。更に彼の社会關係が、勞資關係が、彼に苦痛をのみあたえるが故に、彼はこの關係、社会秩序に反抗的となる。放火、盜み、殺傷等の犯罪が蓄積される。

彼は人間としての人間の生活において苦痛を味う。したがつて彼は動物としての人間の生活において、その享樂を見いだす。過度の飲酒、放縱な性交、賭博等は彼の最も享樂するところである。

クチンスキーの「粗暴の蓄積」「道德的墮落の蓄積」は殖民地労働者のそれであつて本国労働者におけるそれでない。ここで改めて紹介する余裕はない。

労働者の状態はかくして資本の蓄積につれて悪化する。この悪化の物質的基礎は彼にシシュフォスの労働苦をあたえる單調なる機械労働の反復である。したがつて労働者は、彼の動物としての状態がたとえ改善されても、彼の家庭における生活の基礎となる物質的諸条件がたとえ改善されても、資本の蓄積につれて彼の状態は悪化せざるを得ない。資本の蓄積の結果として賃銀が高く支払われることは、クチンスキーの設ける限界をこえて支払われるとしても、まさにマルクスの述べるごとく、「賃銀労働者が自分自身で鍛え上げた金の鎖の大きさと重みとが、その緊張の弛みを許すということに過ぎない。」(資本論尙坂訳四ノ一〇四頁)それは奴隷状態の改善以外の何物でもない。

資本主義体制の内部では労働の社会的生産力の発展のためのすべての方法は労働者の犠牲の下で行われる。資本は労働者に單調なる機械労働の反復を強いるに到る。それは労働者に貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道德的墮落の蓄積を強制する。この蓄積は労働者の生産の主体としての労働者からの疎外を意味する以外の何物でもない。それは労働者の非人間化である。労働者の状態は完全なる人間喪失の状態である。われわれはここにマルクス窮乏化論の本質をみることができる。

註一 「今まで述べてきた諸学説（例へばリカード学説）は労働者相互の競争が彼等の窮乏の原因であるとしている。彼等はこの競争を

生物学的に論拠づけている。すなわち労働者の過度の増加、それは一方においては、良俗の範囲内で行われるものにせよ、そうでないものにせよ、あまりに過度の性交自体に起因し、他方において労働者の繁殖力が賃銀上昇とともに増大することに起因しているが、このことによつて賃銀が再び押し下げられると述べている。どの学説においても、これら理論家達の階級的利害に照応して、この競争の原因は第一に労働者の側になすりつけられ、第二に生物学的に論拠づけられる。」（クチンスキー、前掲書四八頁）

クチンスキーの階級的利害に照応して労働者の窮乏の原因は相対的過剰人口にあるとされる。絶対的窮乏化論は相対的過剰人口をその根底においている。

註二 たとえば、A・スミスは労働を「安楽と自由と幸福との犠牲」とのみ解している。（大内訳「口富論」一ノ七三頁）スミスは勿論近代の労働者階級を頭に浮べているが、近代労働者が何故に正常な生活活動であるべき労働、それ自身が安楽であり自由であり幸福であるべき労働を「安楽と自由と幸福の犠牲」として遂行しなければならぬかの疑問に到達してない。この点については、資本論向坂訳一ノ九五頁参照

註三 クチンスキーのあげる労働者の状態の諸要素は次の如くである。

- 一、労働者保護立法
- 二、失業、短時間労働
- 三、雇傭関係（強制労働）
- 四、労働時間（長さ、夜間労働等々）
- 五、賃銀以外の要素を考慮した労働者の所得（菜園よりの収入、転借人等）
- 六、食物事情（食物の種類、量）

絶対的窮乏化論批判

七、教育関係（学校関係）

八、家族関係（特に児童及婦人労働の影響）

九、労働の強度

十、疾病及死亡率

十一、犯罪

十二、賃銀（名目賃銀並に賃銀の購買力、時間及び出生高払賃銀、実物賃銀制度、賃金差引等）

十三、作業場内の保健衛生関係

十四、社会保証（窮民救済法をふくむ）

十五、傷害

十六、住宅事情（住宅、家賃、作業場施設の狀態等）

註四 単調なる機械労働は精神諸力の活動を必要としない。また肉体諸力の活動をも大部分奪う。だがこの機械労働においても、一定の限度においては自由なる労働の性質をもっている。この労働においても労働する諸器官の緊張の外に、注意力として現われる合目的的な意志が、労働の全継続期間にわたつて必要とされる。注意力の發揮は神経系統の緊張を要求する。これは神経の昂奮以外の何物でもない。したがつて労働者をして一定の限度内における機械労働を享樂せしめる。この点については、資本論（向坂訳二ノ六七頁、三ノ二九六頁）参照、なおゴータ綱領批判をも参照。他に中脩三著「できる子供とできない子供―脳髓の発達と教育―」後篇身体篇第四章自律神経参照

註五 道德的墮落は Moral Degradation の邦訳である。資本論第一卷第七篇第二十四章第七節中のベルンシュタインが崩壞論となつけた箇所では「Entartung」となっている。カウツキーは「Entartung」について次のように述べている。

「しかし“Entartung”についてはどうであろうか。われわれが言葉のせんさくを行うならば、先づマルクスが“Entartung”に就て述べているのでなく、“Degradation”に就て述べていることに気がつくに違いない。資本論の後の版では、エンゲルスは外来語をドイツ語に代えた。そして“Degradation”の代りに“Entartung”を置いた。私は“Erniedrigung”の語を使いたいと思う。此語は肉体的な零落よりも社会的な零落をより意味する。」（カウツキー、前掲書二二〇頁）

しかしここは“Erniedrigung”でなく“Entartung”の蓄積が問題となつてしていると解される。カウツキーに就ては改めて批判を行いたい。

四

われわれはさきにマルクスが、社会変革の担当者労働者階級の窮乏化を社会変革の一物質的基礎として資本論において説明をあたえていると述べた。そして労働者の窮乏の物質的基礎を、クチンスキーと異つて、資本主義体制の内部では労働の社会的生産力の発展が労働者の犠牲を通じて行われるが故に、労働者を部分人間に不具化し、機械の附属物にさせ、労働苦をもつて彼の労働の内容を破かいし、精神的諸力を彼から疎外し、かくして彼にシシュフォスの労働苦をあたえる単調なる機械労働の反復にあることを見てきた。この単調なる機械労働の反復は、労働者の側における貧困、労働苦、奴隸状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積を条件づけることをみてきた。

このマルクス窮乏化論には、ベルンシュタインの次のごとき批判がある。すなわち、彼が崩壊論となすけた資本論第一巻第七篇第二十四章第七節資本主義的蓄積の歴史的傾向の中の次の文章に対する批判である。

「この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則の作用によつて、諸資本の集中によつて、實現される。常に一人の資本家が多くての資本家を減ぼす。」「……あらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少と共に、貧国、抑圧、隸従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また絶えず膨張しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によつて訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も増大する。資本独占は、それと共に且つそのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、これらの資本主義的外被とは調和し得なくなるところの一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者は収奪される。」（資本論向坂訳四ノ三四九頁）

これに対してベルンシュタインは次の如く批判する。

「資本主義体制の崩かいについてマルクスがあたえた命題における、プロレタリアートの増大する数、結合、訓練に関する部分が、プロレタリアートの成熟化をしめし、威力の増大の意味にとれるかどうかは、先に述べた事柄がプロレタリアートの増大する墮落、奴隷状態と結びつきうるかという点にかかつている。」（カウツキー、前掲書二一四頁）

ベルンシュタインは労働者が無知、粗暴、道德的墮落を身自らに蓄積するにかかわらず、プロレタリアートが資本主義的生産そのものの機構によつて訓練され、結集され、組織されることによつて反抗力を増大させるとマルクスが述べていることに疑問をいだいている。プロレタリアートの反抗力の増大は、彼等の政治的成長と政治力の増大と切りはなされてはありえないからである。労働者は資本の蓄積につれて無知、粗暴、墮落の状態につきおとされる。このことは彼等が政治的に成長し、政治力を増大させることを不可能にさせると。

このベルンシュタインの疑問はもつともである。だがそれはマルクスを十分理解していない事から起る疑問である。この疑問に対する解答をする余裕はない。すでにこの稿の予定枚数をはるかに超えている。

このベルンシュタインのマルクス批判に反撃を加えたのが外ならぬカウツキーである。カウツキーはいう。労働者は、絶対的には悪化しない。絶対的には改善する。労働者は社会的に悪化する。したがって労働者は反抗力を増大せうと。このカウツキーの批判は後に所謂、相対的窮乏化論と称された。

稿を改めて、後日カウツキー相対的窮乏化論批判を中心としてベルンシュタインの疑問に対する解答を試みたい。カウツキーによる解答は成功していないからである。この解答で、この小稿で殊更無視した、クチンスキーが強調している相対的過剰人口の圧力による賃銀の労働力価値以下への低下によつて生ずる労働者の状態についても言及したい。このことがベルンシュタインに対する解答のいとぐちとなるからである。